

會



報

1956年7月

187

日本山岳會

山登りの意味

マナスルから帰って

横 有恒

高い山の上はわれわれが日常生活している環境と気候も植物も異なつて、清新な美しい自然が別世界を作っている。これを知ることが登山の楽しみであり目的かもしれない。だがこれを知るにはそのための「聞く耳」と「見る眼」を持たねばならないが、それは一挙に作られるものでなく努力のいることである。私たちは今度いろいろな条件に恵まれてマナスルに登つた、帰る途中マルジャンディの谷からながめた景色はこれまで一度も見たとのらない美しいものだ。四千二百米の高度まで一ぱいに生えているシダー（ヒマラヤ杉）の大木の原生林、その根本を埋めつくした下草としやくなげの群落、その森をとおして雪と氷におおわれたマナスルと、その一連の山々が輝いている景色は「この世の極楽」を思わせ私たちはそこに二時間もいてこのすばらしい景色をあかずながめた。

しかし日本でもこうしたことは十分に楽しめる。胸にしみこむような森の香り、岩はだをあらわにしてよくすんだ空にそびえている山稜など私たちになんらかの印象を与えずにはおかない。鳥の声、咲く花も違い、山には美しいものがすべて集まつている。

この千変万化の自然を楽しむことは、都会生活に疲れたものに清新の気を吹きこみ、蘇生の思いを与えてくれる。これが山登りのよいところである。そしてこのよきを知るには自分の足で登ることである。

私は山に登るのは楽しみであると同時に鍛練だと思ふ。それは自分をあまやかさず、厳格にするもので、しかもこれが他人に強いられるものでなく、自然に向つて自分自身をぶつつけてゆくのである。自然に対してわれわれのごま化しはきかない。それが山登りで教えられる。この点が大事である。いいかえれば自然がわれわれを鍛えてくれる。おかしなもので、自分を甘やかさずに鍛えることによつて楽しさが増してくるが、これを避けると前進ができない。

山に登るには一人で行くことは少なく、多くの場合何人かの仲間と行くが、これによつて苦しいことと楽しいことを共にするようになる。それがフェロー・フィリングというか、共感を呼び仲間の友情を深める、その意味で山登りでほんとうの友情を得たものが多い。この友情は洋の東西を問わず長くつづいている、こういうことは世間一般にもあるが、山登りの時はほど機会が豊富ではない。

この二つのこと、つまり山登りによつて自然のよきを知り、友人を得ることは私たちの生涯の幸せの一つだと思ふ。登山は逃避的なものではないかという人もいるがそんなものではない。山登りは積極的、健康的な性格のもので、それによつてリフレッシュされ日常生活にもはげみを与えるものだ。私が第一に若い人たちにすすめたいのは山登りの楽しみの気持を

おぼえることである。これは多分に精神的な面をもち、したがつて先駆者たちの書いた本にも気をつけつつほしい。

第二には自然を理解するために常識的に植物や地形、地質、気象、昆虫などについての多少の素養をかざねてゆくことも希望する、そうすれば山に登る楽しみは成長するのだらう。山登りは一步一步進んでゆくものだ。血気盛んな若い人たちが自分の力を試してみたい気持はわかるが、経験を一つ一つ積み重ねてゆく地味なゆき方が大切で、この基礎に立つて次にはクライミングや冬山の経験を積み、これをややつてから自分の力をためす「行為の世界」にはいるのである。

「登山は命がけのスポーツだ」といった浦松俊美太郎氏の表現は一面ほんとうで、山には常に危険がひそんでいる。この中には未然に防げるものと防げないものがあるが、危険にあつた場合大切なことは逆上しないことである。失つた度を早くとり戻して判断することがリーダーにとつては特に大切だ。危険を未然に防ぐためには自然に對してあまりおごつた気持にならないこと、自然は人間に對して美しいが、時には冷酷無比なものだから私たちは常に謙虚な気持が大切である。この気持が危険を防ぐ第一歩であり、それが若い人たちの真の勇氣をはげむものではない、猪突猛進でなく、落着いて行く方が勇氣がある。

登山によつて英雄になろうとするのは誤りで登山は自然を楽しむものである。私たちがこんどマナスル登頂に成功したのも征服したのではなくて登つたのである。多くの人々の努力の積上げの上に意志の世界、肉体や精神をフルに使ねばならない行為の世界をもつことが出来た私たちは、そこで自分自身に勝つことが出来た。六千米以上の世界は自分との戦いで、この段階になるとチームの強弱というものがはつきりしてくる。自分をおさえ、人を思いやる気持ちこそチーム・ワークをつくるもので、リーダーのいうことは勇ましく守り、またもしリーダーに誤りがあったとしてもそれを受け入れるだけの寛容さが必要である。またリーダーはチームの弱い人を見ていたわり、隊の余力を見きわめ天候などの客観条件も広く観察する必要がある。また日本の山小屋などでも自分のチームだけでなく、他のチームの思いやりが大切である。スイスの山小屋では社会の常識として実に整然としている。私がいいたいのはヒマラヤの八千米の巨峰をねらうだけが登山ではないということだ。たとえ高度は低くとも山に登つた時写真をとる人、美しい花をながめる人、空や星をみて楽しむ人などそれぞれ関心は多岐に分れてゐる。どの面から入つたとしても楽しむことの根本を忘れたければよい。私はマナスル登頂に成功したことによつて、登山というものが世間をアッといわせるような仕事と思う人が出てくることをおそれる。外国でも八千米級の山に登るのは特殊なことで、ヒマラヤに行くことが登山の最終目的であるかのように考えるのは間違つてゐる。

ナIIはすごい岩壁だとか、ヒマルチュリはなんとかなりそうだとかマチャブチャリの頂上はこちら側からみると頭が二つあるのだとか、雲がずい分出て来たとか、パンブーチーは低いとか頂上の石を拾わねばとか、のどがかわいたとか断片的な色々のことを考えたに過ぎぬ。たちまちのうちに三十分たつてしまった。早速目下田隊員を先を下ろす。僕は頂上の岩にザイルを引つけてダブルロープにして下つてしまった。下のコルに着いた時は何かほつとした気持だつた。酸素を置いたピークに来た時、出発以来初めて湯をのんだ。ばかにうまかつた。ここで酸素をはずして頂上に行つて来たのにはほんと苦しいとか、息切れを感じなかつた。力一杯頂上にはい上つて苦しいとも思わなかつたのにいま頂上から帰つて来たら何だか急に息がはいはいだしてしまつた。やはり相当に緊張していたにちがいない。そこで十分に二本目の残りの酸素を吸つて三本目をつけた下りは全く早かつた。何度でも何度も見えなくなつた頂上の方をふりかへつた。一時二十分にはC VIに帰つて来た。ついに第一攻撃隊も、そしてわれわれも絶対の天候をつかんだ。しかし帰りがけを考えてみればみるほど八千米級の山がいかに困難であるかそして如何に危険であるかということが、そして登頂の成功、不成功は紙一重であるということがわかれはわかるほど今度の登頂はうれしかつた。登つてゐる時に感じなかつた喜びがひしひしと僕の胸をうつつた。

成功の要因

松田 雄一

マナスルに成功してベース・キャンプへおきてきたところで。私自身はこれからまさに頂上攻撃がはじまるという寸前C IIIで不覚にも肺炎をわずらい、登頂シリーズを空しくナイケ・コルに送ることになり残念至極、内地の皆様にお詫びの仕様がご座いません。しかし辰沼ドクターの適切な処置により極めて短期間に回復したことは全く幸運でした。まさに命の恩人です。ヒマラヤの報告書によく見受けられる肺炎、高所でこれにかつたら最後もおしまいだとかねがね思つていましたがその肺炎をヒマラヤの六一五〇米で経験してしまつてはもういうことはありません。

A/Eの編成により行動したわれわれは稀にみる好天気とD班のポーターの健斗により荷上げは順調に涉り五月三日には約三トンの荷を前進根拠地であるC IV(六六〇〇米)へ集結してしまひました。ここで全員しばらく休養するか、それともこの好天気を利して直ちに頂上を攻撃するか検討された結果、サードの意見を採用して引続いて直ちに登頂のシリーズに入ることになり

▽第一登頂隊 今西、ガルツェ
▽第二登頂隊 加藤、日下田
▽第一登頂サポーター隊 村木、シュルパ五名
▽第二登頂サポーター隊 大塚、

シエルバ三名
▽C V責任者 辰沼(酸素係)
▽C IV責任者 小原
▽C III 宿泊せず
▽C II 責任者 千谷、なおC IIには横隊長 徳永ドクターと私がおり、依田さんは撮影のためC V(七二〇〇米)まで登つた右の如く任務を分担し、一週間で二回の登頂を行うことにした。ここで登頂の成因を列記してみると

①登頂シリーズに快晴無風に近い好天を掴み得たこと
②チーム・ワークが完ぺきであつた。

(a) 横隊長の位置がC II(五六〇〇米)であつたが、今回は芳野さんの苦心の結果無電機は何れも完ぺきで、常時C II、C IV、C Vとは通話が可能であつた。このため上部の様子も下によく判り、それに基いて隊長の指令がうまくゆきとどいた。

(b) C IVに小原さんが頑張つて登頂隊、サポーターの連絡の中心となつた。小原さんのC IVにおけるリーダーシップは大したものであつた。

(c) 補給隊C IIとC IV間が千谷さんにより完全に確保されてゐた。

(d) 辰沼さんがC Vに頑張つて酸素装備の点検整備と不眠で酸素発生機を操作し、攻撃隊員を安眠させることが出来た。

(e) 攻撃隊のサポーターの村木、大塚隊員がよくそのサポーターの任を果たした。

③酸素装備が殆ど完全であつた

④ルートを変更して最短コース(スノー・エプロンのコース)をとりキャンプを一個短縮し得た。

以上のように各フアクターは何れも完全であつた。そしてこのことはたしかに好天という幸運に恵まれはしたが、そのチャンスをついに掴み得る実力を持つたといえる。中でもチーム・ワークの完ぺきさは実に気持のよいことである。

二隊連続登頂はナイケから眺めていても実にすつきりした見事なものでした。第二登頂隊の登つた十一日に南アンダマン海にモンスーンが発生し、われわれが第四キャンプまで撤収した翌日からモンスーン・コンデイションに入り、雪が降り出したのを見てはついているという以外にはありません。この他私の病気の全快にしても、C IVとC V間の雪崩にしてもわれわれにとつて幸運ばかりです。

送つていただいたシブトンさんのスピー早速ガルツェンに見せ二人でシブトンを偲びました。しかし彼のシブトンとの別れ方は余りすつきりしないらしく、彼が最近シブトンを余り尊敬してゐないのはいさ意外でもありました。というのは彼の兄、ラクパ・テンシン(彼も同じくサバント)がつかまつた時にシブトンが積極的に救出の手をのべなかつたこと、シブトンはパキスタンびいきで、印度びいきではないこと、カシュガルで別れて以来交通してゐないことなどがその原因だそうです。そして若し来年エヴェレストの横断にシブトンがリーダーで来たとしても

行く気がないと聞かれたのは少し意外でもありました。あのC IIの内容に関してはニューデリー駅の事件など実演入りで解決して貰いました。それから一頭の牛の件は、他の領事館では牛は二、三頭いるのに英国の領事館のみ一頭で、それで何から何までやれといわれて困つた話もききました。(英国のサバントはケチだそうです)そして Mountain of Taryar のコピーの Muzghata の登山はシブトンが書いてゐるより遙かに悲壮なものであつたそうです。シブトンが死にそうになるほど参つてゐたことが少しも書かれていないので、それには大笑しました。それから若しシブトンに手紙でも書くのならガルツェン・ノルブとして欲しいそうです。シブトンの知つてゐるガルツェンは非常に多いのでノルブと入れないと間違ふ恐れもあるといつていました。何れにしてもサードの過去の登山生活のうち多くの容積と占めてゐるものはシブトンとの登山でしよう。このことは彼の会話からも十分察せられます。そして最後に現在シブトン・バラ・サバには余り魅力はないけれど、それでも一通でも彼を誘う手紙が来たらやはり彼の気持はシブトンに傾くかも知れないといった言葉が深く印象に残りました。とにかくよいシエルバです。横さんも今日はガルツェンが佐伯宗作にどこが似ているといつておられました。お忙しいところシブトンのコピー本堂に有難うございました。ガルツェンもそのご好意に対し深く感謝しておりました。(五月十五日ベース・キャンプにて、成瀬氏あて)

戦後最初の アムネ・マチン探検

VIII

吉 沢 一 郎

共産軍が内蒙古、北支、北西シナ、満洲、トルキスタン(新疆省)など至るところで大勝を博しているという。

いよいよ本当に急がなければならぬ。翌日ジャガル河を渡りしばかりは道に沿って行ったが、やがてクデルの丘に入る。キャラバンの連中は陽気に唄を歌って進む。左(北)にはイケ・アマン、右(南)にはバガ・アマンの山々が並ぶ。これは今までのどんな地図にも載っていない名前である。人の住むツアガン・ウス(白い水)という部落でC32(三三三三三)とする。

この日また蘭州から無電が入る。馬大佐はオリン泊のチャカールに戻り後退軍を迎え、タン・チエン・テは、クラークと共に青海經由西寧に來い、ということであった。馬大佐と別れてなお東方に向い荒地の中にC33。翌朝八時出発、チベット人がまた遠くの丘上で見張りをやっている。こちらの武力を偵察しているのである。

沙柳河の岸辺(三五四五米)でC34。南に「白い杉の山」、北に「シャルザ(鉛の山)」が聳えている。偵察隊の報告で、盗賊団に包囲されていようなので、夜通し交代で見張りをする。その日は何もなかったが、こういう集団は何日もあとをつけて来、こちらに隙がないと見ると、いつの間にか消え失せてしまう。この辺の旅行には武装兵力がないと全く危険である。

次のC35は「盗賊の井戸」というところにおく。水は穢なかつた。いつでも盗賊に豹変するチベット族がうろろうしている。夜の襲撃を避ける意味で夜中に出発。ダブソン泊(ダタイ・ダバスその他の異名あり)の北西岸を目指して行く。やがて夜が明けて、白い塩の輪に囲まれたエメラルド色の湖が見えて来た。

ダブソン泊の北方、同名の河の畔にC36。しかし昼間の暑熱を考へ、午後十時から仕度にかゝり、先発は午後三時、最後のものは五時十五分に幕営地を後にする。所々に泉があり、アイアリスが一面に咲いている原が二十哩も続いている。蒙古人の牧人二十六家族が住んでいる場所を通り過ぎる。十三時間後にC37(三三三三〇米)についた。

翌日はいよいよゾアハセ峠(三七五〇米)によつて南ココノール山脈を越える。道を外れて急峻な滑り易い斜面を下り、やがてココノールの南岸半哩のところにある大喇嘛という緑なす芝生の牧場についた。こゝをC38とする。テントは大ラマ河(唐古特族はスタチナ・

マという)の北岸に位置したが、見逃かす東方三十哩に亘りタングート族の黒いテントが張られている。

青海には中央部に一つの島がある。これをシナ人はハイハイン山(海の中央にある山)チベット人はゾルグノン(海の頭)、デデ族(高地蒙古人)はクイスイ(海の臍)という。冬は氷の上を歩いて一日で行ける。

また北西の隅にも一島がある。一般にハイ・セ・ビ(海の脾臓)といわれているが、チベット人はツェルワン・レ(脾臓山)と呼んでいる。

夜中にまた馬將軍から、大至急前進せよ、という無電が入った。そこで大部分の部隊は彼の命令により、馬大佐のいるチャカルへ戻ることになる。残るのは数台の荷馬車、荷馬と驢馬二十頭、回教徒の騎馬兵二十二名、武装したチベット人四十名だけとなった。

次のC39は湖の南岸中部。翌日は途中一回休んだだけで、夜になつても前進を続け、湖の南東端附近にC40。それからタオ・タン河(逆に流れる河)に沿つて東進、同名の部落でC41これは西行した時のC1でもある。

次いで日月山脈を越え、丹葛爾(C42)經由、遂に西寧へ入った。

蘭州に着くと、中共軍が間近かに迫っていることを知った。ここで馬歩芳將軍はクラーク等の報告をきき、その労苦を謝した。総ての任務は終わったのである。

四日目の朝、八月十三日、丁度香港から二月十八日についてから六カ月目である。馬將軍はクラーク

クを呼んだ。出発の用意をせよ、というのである。

そこで、アラシヤンに潜入しようとするドルジェはじめ、多くの入々に別れを告げ、將軍の飛行機に同乗する。これは重慶經由で広東に行く。彼はこゝで国民政府と協議の上、香港からメッカに参詣し、次いでエジプトのカイロに飛ぶ積りである。金塊六十万オンスはもう一つの飛行機に積まれたらしい。

馬將軍はクラークに、友人兼購買代理人としてカイロまで一緒に行ってくれと頼む。彼は承知した。アメリカ政府は、彼に、中共軍を敵とすることは好まないかも知れない、しかし、商人となり、安穩な生活をするに對しては、別に異議をさし挟む理由はないであらう、というのが彼の理屈であつた。(完)

マナスル隊員帰国

第三次マナスル登山隊隊長以下小原、千谷、今西、加藤、大塚、日下田、徳永、依田の九隊員は六月二十二日、辰沼、村木、松田の三隊員は七月十一日それぞれ日航機で羽田空港に無事帰国した。

第三次マナスル隊員の光榮

去る六月二十二日無事東京に帰着した横隊長以下九名は六月二十五日天皇陛下に拝謁を賜わり、後、皇太子殿下にも拝謁を賜わりピツケルを献上申上げた。

文部大臣より感謝状

文部省では第三次マナスル登山

隊の登頂成功に對し本会並びに隊員十二名に對しつぎの感謝状を授与した。

感謝状

貴会(下)は第三次マナスル登山隊員としてよく困難に耐えネパール国ヒマラヤ山系の高峰マナスル登頂の壮舉に参加しスポーツ界並びに學術界に多大の貢獻をされましたよつて感謝の意を表します昭和三十一年六月二十三日 文部大臣 清瀬 一郎

シエルバにバッジを贈る

横隊長より今回の登頂成功に對して終始隊の行動の力となつてくれたシエルバ一同に對し本会バッジを贈りたい旨申出があつたので本会はサーダーのガルツェンには正章並に略章を、他の十九名のシエルバには略章を贈つた。

マナスル登山記念煙草発売

専売局では今回のマナスル登頂を記念すべく今夏マナスル登頂記念煙草を発売することに決定した。

横氏、仙台の名譽市民に

横隊長の出身地たる仙台市議會では五月廿日開催の市議會でマナスル登頂の榮与に敬意を表し横隊長を仙台市名譽市民に推挙した。

国産裝備展示展開く

第三次マナスル登山隊の使用した天幕、寝袋、アットレス、酸素吸入器、酸素発生機、無線電話機その他個人裝備などの國産裝備の展示展が通信省、外務省後援で世界各主要都市で開催される。

海外からの祝電

☆☆☆ 今回のマナスル登頂の成功に對して本会あつた左記諸祝電並に祝文があつたので早速祝電を發した

◆ Please convey heartiest congratulations on climbing Manaslu

John Hunt Alpine Club
Many Congratulations on Manaslu

Henderson.

◆ Tres vives Felicitations Conquete Manaslu Amities Jean Franco Groupe Haute Montagne

以上電報。

◆ The Italian newspapers are just now announcing the conquest of Manaslu by your party.

I am very glad that your perseverance and your careful organization got you and your companions the deserved victory. I congratulate heartily you and your party on the success of the Japanese scientists and climbers. Yours very sincerely.

The Director
Prof. Ardito Desio.

◆ I was most delighted to read of your success on Manaslu and wish to congratulate you and the Japanese Alpine Club on behalf of the American Alpine Club.
As you know, we have followed the campaign with the greatest of interest and had

the pleasure of publishing an excellent article by Mr. Mita in our American Alpine Journal.

With the Mittelegi Arete, Mt. Alberta, and now Manaslu, you have certainly made an extraordinary mountaineering record and I can do no better than to wish you continued success of the same order.

Most Sincerely

John. C. Oberlin.
President.

以上横氏宛。

◆ Profoundly happy convey the successful conquest of the Manaslu peak twice by BE Members of Your Expedition on ninth and eleventh accept my felicitations

Foreign Minister Nepal

なお日本国内各地よりも祝電多数頂戴致しました。右各位に対し早速御礼状差上げましたが或は本会の手落ちで失礼ながら洩れいるようなこともあるかと存じます。その節は本誌上をもつて御礼に代えたく何卒ご諒承の程願ひ上げます

アルパイン・クラブ

レジスターのこと

成瀬 岩雄

アルパイン・クラブ・レジスターを初めて見たのは亡くなった大島亮吉君の家であつたが、その中には当時存命中の高名なる登山家はまだ一沢山含まれていたもので頁を繰るのに暇ない程であつた。

未だ三巻全部揃つていなかったけれども横さんがスイスから持つて帰られた、当時日本における唯一のものであつた。勿論横さんの所有物ではあつたが所在地は大島君の家であつたといつては変な言い廻しに聞えるけれども、後に出た「先蹤者」と所有者の人柄を思ひ併せて見ればこの意味もうなづけるであらう。事実、大島君にとつては天来の賜物の如きもので、文字通り膚身を離すことが出来なかつたのだ。当時、外語の夜学に通つていた彼が恰も愛児を抱える如く抱き歩いてゐた恰好は未だに忘れられない。講議の間の十分の休憩時間にチョットでも眼を通して置きたいというのが彼の心境だつたのだ。

三巻よりなるこの稀観本の内容については編集者たるママとの關係について島田君が以前「全報」に書かれてゐるので今更ここに駄弁を振うまでのこともないが今ここに僕が述べたいのは、要するにこの本もいよゝ古典的価値が増さるゝ段階に到達したので一筆記して見たくなつたのだ。

というのは最後の第三巻は一八七七年から一八九〇年までの入会者のみを集めたものだが、これとて数えて見れば一八九〇年になるわけでも去年で六十五年になるわけであるが昨年遂にこの世を去つた者が何人いるのかと、まるで「英国土岳会員戸籍調べ」みたいなことに僕をして強ひしめたのも当世流行語を以てすれば結局このレジスターが「其処にあるからだ」の一言しかないのだが、昨一九五五年現在で六十五年の在籍者は僅かに一名しか残つていなかった。この一名がまたこのアルパイン・クラブ・レジスターそのものの、ようなクラブとは切つても切れぬ御縁のヘンリー・パスチュール(Charles Henry Pastur)だつたのである。アルパイン・クラブも来年は創立百年祭といふことになるのだから会員に親や息が入り交つてゐるもの当然のことだが、このパスチュール位一族郎党の多くが次々と会員になつてゐるもの如何に英国土岳会と雖も他に例がないようだ。

まず彼の父、兄、息子二人は勿論会員であつたし、三番目の息もやがて会員に推挙せらるゝだらうといふから六代続いて会員になるという事は前例がないそうである。それにこれだけでなくその兄の長女はエベレストで有名なノートンの夫人だつたし、次女はガイドレスの登山で令名を馳せた第二十四代のアルパイン・クラブ会長ジョージ・モース(George Morse)郷の夫人だつたといふし、其他甥にも会員がいたとか、親子兄弟親族これだけの、稱「Alpine Family」は無かつたそうである。

このパスチュール御自身も以前は副会長をやつたし、七十六年の永きに渉り登山を楽しみ、マンメリーの仲間の最後の一人だつたのであるが昨年遂にこの世を去つたのでこれで遂に既刊のアルパイン・クラブ・レジスターには存命の者は一人もいなくなつてしまつたのだ。

本が古典の域に列するに際し、偶然とはいへ、よくもこのA・Cの化身とも云ふべきパスチュールが最後の一人まで踏み止つたといふことは世の廻り合せも面白いものだと思ふし、この書自身のために誠にいゝしめくゝりであり、また古典への慶き首途だつた。そして編者(第一巻の)ママに對してもこの上もなきよきはなわけではないか。(一九五六・七・九記)

大島亮吉氏遺稿の発刊

この三月二十四日は大島亮吉氏の三十回忌にあつたので本郷真浄寺で故人の追悼会を催した。来会者約四十名に及び遭難当時の懐古談や故人の語に花が咲いた。席上、故人の遺稿の未発表のものを出版することに決議、委員として本郷常幸君が引受られた。

故人もヒマラヤには早くから憧憬を持つていた一人であるだけにこの会の動機もマナスルに何等かのつながりがあるような気がしたのは私のみではなかつた。

出席者一同横隊長宛寄書を送りマナスル隊の進行状況についての報告をした。(成瀬)

登山全書第二巻発行

本会監修、川崎隆章氏編、河出書房発行の登山全書第二巻岩登り沢歩き編が出た。主な内容は随筆ケルンを積む(藤木九三)岩登りのトレーニング、岩登り用具、岩登り術、ザイル工作法、ルートの選び方、岩登りの危険と対策、その他、第三巻は秋山編。

お願い 住所変更をされた場合は必ず会へご一報下さい。

ナイロンロープの摩耗試験

金坂 一郎

昭和二十九年の暮から翌春にかけて、穂高においてナイロン・ロープの切断事故が、相ついで三回起きた。(注一)ナイロンはマニラにくらべて抗張力、耐衝撃力ともに優れていることが知られていた折から、この事故はクライマーたちにとつて寝耳に水のショックを与えた。

しかしナイロンの欠陥がそれまで全く知られていなかった訳ではない。古くはYoungがRunning belayにおけるSlingにナイロンを用いた場合の弱さについて指摘している。(注二)これは記述が簡単のため、よく要領を得ないが、想像するに、二本の綱が交叉して一方が他方をこする場合、こすられる綱がナイロンだとしたら切断しやすい、ということではないかと想像する。これと同様の事故については、慶応山岳部員が米軍の妙義山部隊において聞いたことがあるそうだ。

これとは別に、慶応山岳部員が富士山の堅雪斜面において確保練習をした際、九ミリのナイロン・ロープをピッケルのブレードの根元に巻きつけて直接確保を行つたら四回五回の練習で二ヶ所において子縄(Yarn)の一本が切断しているのを発見した。傾斜は約四〇度、綱の長さ三米程、スリップの距離は大体綱の長さの二倍。直接確保であるから、綱が切れやすいのは当然としても、注目すべきは

綱の切れ口がザラ／＼して、明らかにナイロンが融けたらしい点である。

またナイロン・ロープは、取扱いが悪くて岩場をひきずつて歩くときには、簡単に繊維が切れて、著しく毛ばたつて来る。そして加熱したブリキ板によつて、カミソリを使う以上に容易に切断し得ることも知られている。

しかし当時の一般人は、綱の強さといえは、単に最大抗張力(実験室において最良の条件下に引張つて切断したときの強さ)だけに注目し、少し力学の素養のある人でも、耐衝撃力を考える程度であつたのだから、この両者ともにマニラに優るナイロンが、何故あのように脆くも切断したか、これは不思議な疑問であつた。

これに対して東洋レーヨンでは篠田氏の指導の下に、マニラとナイロンとの比較試験を行つた。(注三)その結果明らかとなつたことは、ナイロンはマニラに比較して、長さに直角の方向の摩擦に対して、著しく弱いこと、摩擦によつて生じた程度の熱によつて切断部に融着を起こすことである。例えば八ミリのナイロン・ロープは、四〇キロの張力の下に三角やすりを二〇／＼三センチこすりつけただけで切断し(一ミリのナイロンでは六〇／＼七センチ、一二ミリのマニラでは四八〇／＼七〇センチ)しかも張力が大きいときほど切断しやすい、ということが明らかになつた。

これは、岩場における使用を考えると、重大な欠陥といわなければならない。墜落に際し、綱が一

〇〇キロ以上の張力の下に、岩角をこするということからは、当然予想しなければならぬことは、当然予想その対策としてすぐ思い浮かべられるのは制動確保である。制動確保を行えば、たとえ綱が岩角にこすりつけられようとも、長きの方向にこすられるのであるから、こゝに問題となつているナイロンの欠陥が現れないだろうと推察される。これを確めようとしたのが今回の試験である。

試験は昭和三十年二月六日、三月九日の両日にわたつて丸三製紙株式会社修理工場において行つた。試験装置としては綱を鋸盤の鋸刃取付部にEye spliceを作つて取付け、被切断材料取付部に五分の丸荒やすり(または硬鋼製の直角刃)を固定し、綱をこれに押しこすりつける。綱をやすりに押しこすりつけるときの荷重は四五キロ、綱はこの荷重によりやすりの上で三〇度曲がるように張り方を調節したから、運転初期の綱の張力は九〇キロになる筈だ。但しナイロンの場合にはすぐ伸びるので、綱の平均張力としてはマニラの場合よりも小さくなるが、接触角はかなり増大した。ストロークは一三〇ミリ、毎分七四往復だから、平均秒速は三二〇ミリである。鋼製刃は初め刃先が鋭過ぎ、二／＼三回で切断したので、適当に丸めてからやり直した。

結果は表に示す通りであるが、ブリマスはマナスル一九五三年隊の使用したもので、岩稜会は前穂東壁にて切断により遭難したときのもの、強靱繊維社のものは余り使

用しないのに、運搬しているうちにくた／＼になつてしまつたものの、陸軍気球用はゴンドラ吊下げ用の古い／＼になつた細い綱

で、大麻と推定されるものである。ナイロンとマニラの新品につきやすり試験を見ると、ナイロンはマニラの七割である。しかし単位

種 別	ナイロン(新) (東京製綱)	ナイロン(古) (Plymouth)	ナイロン(細) (岩稜会)	マニラ(新) (東京製綱)	マニラ(古) (強靱繊維)	大麻(古) (陸軍気球用)
直 径 mm	10	10	8.5	12	13.5	9
単 位 重 量 gr/m	68.8	59.8	42.1	95.8	105.5	56.6
抗 張 力 kg	1877	1513	—	1525	1260	572
抗 張 力 / 単 位 重 量	27.3	25.3	—	15.9	11.9	10.1
切 断 前 後 の 往 復 回 数	第 1 回	20	19	33	18	29
	第 2 回	20	16	23.5	21	17
	第 3 回	—	20	—	20	26
	第 4 回	—	17	—	—	—
	平 均	20.0	18.0	11.0	28.3	27.5
	回数×10 ³ /単位重量	291	301	261	296	486
	第 1 回	14.5	—	24	—	20
	第 2 回	12	—	20	—	20
	第 3 回	13	—	24.5	—	—
	平 均	13.2	—	22.8	—	20.0
鋼 製 刃	回数×10 ³ /単位重量	192	—	238	—	353

重量を考えれば殆んど差がない。刃に対してはマニラの方が少し強いが、これはナイロンの伸びが大きいので、刃に対する接触角が増大した影響かと想像される。このときはマニラの六割程度であるから、このような問題においては余り大きな差とはいえない。しかし細い綱はやすりの場合でもマニラの半分以下になる。大麻は非常に強く、同一重量のマニラの五割以上強い。

以上の実験により、現在多く使用される一〇ミリのナイロン・ロープを、一二ミリのマニラ・ロープと比較するときは、大きな差ではないがナイロンの方が若干劣る。しかしこれには試験片の太さの差異や、ナイロンの伸びによる接触角の増加の影響も考えられるので、ナイロン固有の欠点とは断じ難く、むしろ試験装置の不備によるものとも考えられる。従つて制動確保の適用によつて、綱が岩角にすれるも、綱は長さの方向にこすられるのであるから、それだけナイロンの致命的欠陥は現れないように推定される。しかし一〇ミリ以下の細いものは、二重、三重にしていない限り、信頼できないような印象を与える。また本実験における綱の張力は九〇キロであるから、それ以上の張力に対しては若干の疑問を残している。

この実験において、特に優れた結果を示したのは大麻の綱であつた。近頃本邦で使用される登山綱は、殆んどマニラかナイロンのものであるが、単純に引張り強さやResiliencyのみ注目することなく、大麻系統の麻を再検討する必要がある。また綱や各種合成

繊維についても検討すべきであろう。

以上の報告を終るに当つて、多くの試料を提供された東京製綱株式会社、試験設備を提供された丸三製紙株式会社、試験を準備された藤田達夫氏、試験を実施された日大山岳部の現役諸君に深謝しな

図書紹介

ザイルのトップ

F・ロッシュ著
近藤 等訳

シャモニーの名ガイド、ジャン・セルヴェタは稼業にせいで出していた金と六年間のしぶんの労力を傾けて家を建て、下宿家をはじめて、その年のシーズンのおわりに米人のお客を案内してプチ・ドリユーへのぼり、頂上直下で雷にやられて非業の死をとげた。むすこのピエールは親のいいつけでホテルの経営者としての修業をさせられていたが、山が好きでたまらずボーターになつてモンブランに出かけたかえりに悲報を聞いて救援隊に加わり、悪条件の岩場で墜ちて大怪我をする。重なる悲劇にピエールの母のなげき。ピエールは傷がなおつても絶壁にかかると目まいがして何として止まらず、山登りを断念して人

生のハリを失いやけになるが、許婚のアリスの愛と山なまの若ものたちの友情にほだされ、またジャン雷死のおりボーターとして命がけでお客を無事につれおろしそのため凍傷にかかつて足先を切つたジョルジュがまた山に出かける勇氣にけがまされて岩のぼりをはじめる。危い岩場で立ちすくむジョルジュを助けようとして夢中で悪魔を攀じるとたんにめまいを忘れることが出来た。かくてこの二人はザイルにつながれ、人知れずエグイユ・ヴェルトの北壁に立ちむかい、闘志をわかしかわるがわるザイルのトップに立つて難所の資格をとる。ピエールはフィアンセのところにかけつける。

著者フリザン・ロッシュはパリジャンの身でシャモニーに移り、山を熱愛してガイドになつた変りもの、また文筆の士として知られている。この小説は筋としては取りたてていふ程のことではないが、ガイドたちの山への情熱とその素朴純真な友情をじつにうまうまがき出し、シャモニーを取りまく針峯や岩壁や氷河、目もくらむく絶壁や決してしない氷雪のクローアル、変幻する雲霧雨雪や岩をつんざいて落ちる雷などのいきいきとした描写、登場のテクニクのこまかく正確な敘述などは読者を魅了して一気に読ませる。フランスで大へん評判をとつたというのうなずかれる。近藤氏の訳文はよく原著の意を伝えている。(S・H) 昭和三十一年五月白水社刊、B6判、本文三四〇頁、写真八葉三二〇円

アルピニズム・アクロバチコ

ギド・レイ著
河合 享訳

世界登山界の場は近ごろ欧州アルプスからアンデスへヒマラヤへと移つた観があり、アルプスの山のぼりも新らしい道具とテクニクを駆使してむかしは思ひもよらなかつた懸崖や氷壁をこなすようになった。それにも抱らず前世紀のおわりから今世紀のはじめにかけての登山家であるキド・レイの著者は、山岳書の古典として今なお広く多くの人によまれ新らしい感激をもつて迎えられているのである。いま河合享氏の手によつてこの名著が、近ごろの読書界を賑わす山岳書の一つに加えられたことは喜ばしい。仏訳からの重訳であるが、訳者ガイヤーはレイの山友であり訳出に當つて原著者の協力を得たことは巻末のレイの一文でもわかる通りで、よく原文の調子を出しているから邦訳文に少しの誤りがあつてもよく原文の意を伝えていると云うべきであろう。挿入の写真は鮮明で本文の理解を助けるが、原著のレイやヴィトリオ・セラの撮影にかかるといふのが全部はふかれていたのは惜しい氣もする。

この一書に収められたシャモニーをめぐる針峯とドロミチの岩峯の登攀記は「アルプスとの闘争が労働のごとく有益であり芸術のごとく高尚であり信仰のごとく美しいことを信じている」著者が四十を越した身で、それまで打ちこんでいたクラシック登山に一転機が画し新しい岩のぼりに突進し

て飽くところを知らぬ山に対する熱情をぶちまけ、命がけでしがみついている岩を透して感じる山のいぶきやそこに展開するあらう自然のうごきを、真に山を知るもののみが感じ得るほどのさをもつて書きあらわし、その「大きな円天井の壁面に大きな乱雲のあいだに描かれた戦う天使のようでもあり天から転落する巨人のようでもある」ガイドや自分たちの苦悶をいきいきと描いて、読むものをして息もつかせない。その頃は一般から無謀とされ曲芸視されていたアクロバチック登山に熱中したかれは同時に山をおそれ山を敬うつまましい山岳の巡礼であり、その行動は慎重をきわめ「常に増大する山での惨事の数を前にして、幸運は要心ぶかい登山家たちを好んで保護するものであるとの確信をますます深めている」といふ。

この本をよむと、いつまでも燃えさかる若々しいアルピニストの氣迫と同時に、間もなく山に登れなくなる予感を払いきれない老岳人の諦観に胸を打たれる。(S・H) 昭和三十一年六月朋文堂刊、B6判、本文三〇〇頁、写真一四葉、三八〇円

ヒマラヤの真珠

マラーニニ著
牧野 文子訳

一九三七年十月マラーニニ氏が歩られたシッキム山旅の話は、イタリヤにおけるスキーや北海道におけるアイヌの生態のカラースライドといつしよに、一昨年五月本会の小集会で多数の会員をよる

こぼせ、その機縁で同氏は本会員になられたことでもあるから、牧野女史の訳になるこの本が今回装を新たに再び世に出たことは喜ばしい。

これは著者がチベット旅行の帰途、ひとりで三週間一人のシエルパに数人の人夫と一匹の小犬をつれて、シッキムの首都ガントックからティスタ河を溯り、スキーをつかつて五千米を越える三つの峠にのぼりカンツォンツォンガー(著者の呼称による)を盟主とするヒマラヤの峻峯を間近に眺める静かな旅。高い山に登る気負った遠征の記録ではなくて、気がるく気ままに谷と峠と森林と山村と高原とを歩るきまわつたのだから心あたまる紀行である。

人類学者であり登山家でありスキーヤーである著者は先ずガンティックのマハラジャ邸の署名簿にヒマラヤ登山の名高い先蹤者のサインを見出して崇敬の念に打たれ、湿った密林のむせるような湿気になやみ、くらやみの沈黙のひびきの無意味さにおのき、乾いた高所に出てホッとすると同時に「どこでも高い山は似かよつたところがある」故国の山と人とを較べて見たり、チベット語を駆使し人夫たちと親しんでからの生活や伝説に耳を傾けその同僚愛に打たれたり、道ずれになつた二英人がはじめての山行で山酔ひに苦しみがはら山の魅力のとりこになるのを見て喜び、山好きになるのは山を「理解」したことでありと「なぜ我々は山に行くのだろうか」と自問自答したりする。

おこさせるようなおもしろく気もちよく読める本である。本訳書のため特に著者から寄せられた写真が鮮明、中でもカヴァーの「月光のカンツォンツォンガー」は印象が深い。

同じ著者の第二回チベット入り(一九四八年)を誌した「秘境チベット」Secret Tibet はなかなか評判がよく数国語に訳されてゐる。この本も訳者の麗筆によつてわれわれにまみえる日を期待してやまない。(S・H)

昭和三十一年五月理論社刊、B6版、本文一四七頁、写真四五葉、四〇〇円

K2—非情の山
ハウストン著
伊藤 洋平訳

これは一九三八年にK2への遠征隊を率いたアメリカのハウストンが、一九五三年にK2の頂に近く迫つたときの登攀記である。しかし、たゞ頂に迫つたというだけでなく、高度七五〇米のC8で連続一週間の吹雪を伴つた猛烈な嵐に遭遇し、しかも一僚友の発病によつて遂に下降と開いて、次第に加わる高度衰退と闘いつつ健全な者でも余程の登攀技術をもたぬ限り、到底手のほどこしような急斜面を、依然静まらぬ嵐を冒して下つた壮烈な記でもある。特に下降中アクシデントが起り、奇蹟的に死者はなかつたが、殆んど全員が負傷し凍傷に冒されその上病友を雪崩にさらわれてしまった。そして、かくもC7で一夜を過し、前よりもつと悪い状態で下降をつづけ、一行の団結

と友情と高度の登攀技術のお蔭で、C8で嵐が始まつてから十三日目にBCまで下降することが出来た、登山史上でも稀に見る貴重な記録でもある。

一行が全員C8に上り、そこC2との間に全くサポート隊が残つていなかつたことは、いくらBCと無電の連絡が確保されていたと云つても、批判の対象にはなるであらう(一九三四年のナンガのメルクル隊と偶然に酷似している)。しかし経験に富む団結の堅い隊の場合には、人間の底力がどのくらい強いものであるかも、合せて知らせてくれる記録でもある。ヒマラヤと云わず、山で烈しい難事に遭遇した場合、必らず生還できるという強い希望を起させてくれるのも、こうした登山記でありその点からも一読の価値は十分ありう。

訳文は読み易い日本語に移されている。但し地名の読み方に二、三間違ひがあるから再版の時は訂正されることを望む。(望月)

昭和卅一年六月白水社刊、二九五頁、写真一八葉、三五〇円

モン・ブランから ヒマラヤへ

レビュファ著
近藤 等訳

著者レビュファのことは、アンナブルナの登頂記を読んだ人には説明の要もなからうが、ジョン・ハントがエヴェレストへ出かけた前年にスイスを訪れた時、態たレビュファの意見をきくためパリで一日を過したことが、ハントの本にも出てゐる。レビュファの岩壁

登攀をのべた「星と嵐」は同じ訳者によつて昨年六月刊行され好評を博したが(会報一八〇号参照)、今回また近藤氏によつて本訳書が見事にまとめられたことは、嬉しい。

私はこの原本を遺憾ながらまだ見ていないが訳者の「あとがき」によると世界中のアルピニストの好意で集めた六九葉の写真で飾られ、まことに素晴らしい書物の由である。

穂高岳の早期 登山者 (五)

山崎 安治

六 鳥水氏の明神岳登山

明治四十四年小島鳥水氏は前記の如く嘉与吉を案内として穂高、槍縦走に成功した(27)がこれは鶴殿氏につぐ二回目の縦走記録と思われる。岳川より前穂、奥穂と山稜を伝い湖沢の岩小舎に泊り(本誌一八一号参照)二日目(七月二十二日)は湖沢岳(鶴殿氏の北穂高)に登つて山稜を北行したとあるから湖沢岳東北面の下りは初通過といふことになる。(鶴殿氏一行はここを通らず二日目は湖沢岳と北穂の最低鞍部から縦走を始めてゐる)さらに北穂、南岳を経て槍ヶ岳に到り頂下一泊し、二十三日蒲田に下り、二十四日再び上高地に戻つて二十五日宮川谷より明神の最南峰に達した。宮川谷「嘉門次を案内として宮川の池に泊り、宮川の窪に登り、岩壁を直進して御幣岳の最南峰に登

ある。邦訳書は価格の関係から写真を一葉に減らしてはいるがしかしその一葉一葉が中々見ごたえのある立派な作品であり、無論中には二度とあることの出来ないようなものが少くない。

写真の複製、本文の紙質、印刷装釘、製本なども良心的な作である。(望月)

昭和卅一年六月白水社刊 一二六頁、四八〇円

嘉門次の言によれば新登路よりの初登山なりと、この時小槍ヶ岳と新称して紹介す。それより各峰を縦走して二十一日の来路と合し降路は宮川谷に入りて梓川に下り神河内に帰宿」と記されている。いまの下宮川谷を直登して尾根に取着き、最南峰に立ち、明神主峰まで縦走して上宮川谷を降路にとつたものと考えてよからう。下宮川谷から最南峰への登攀や現在の明神岳第二峰の主峰側への下降など相当難だつたろうと想像される。鳥水氏のこの日誌から下宮川谷を登つたとした理由としては、その後大正五年七月十六日佐伯某氏が嘉門次を案内としてこの方面からの登攀の報告(28)に「三ノ池の傍より下宮川の沢に入り、夫より明神の頭までは先年の鳥水氏の行路と同様、其後氏はワデシヤの側を通られ、小生は岳川の側をとりて三本槍のうち二本目まで登り候」とあり鳥水氏の登路が明らかに指示されているものによつたのである。

七 鶴殿氏の奥、西穂登山
大正元年八月鶴殿氏は奥穂高から西穂高の山稜の初縦走をねらつて上高地を訪れた。(29)最初の子

定では岳川から前穂高に登り、奥穂、西穂、中尾峰へと途中一泊した縦走を目論んだのであるが、案内の中島作次郎に相談するとそれは一泊では不可能だというのが、まず岳川から西方の峠壁の中凹部（現在の天狗の谷）にて奥穂高に到り、引返して西穂高へ縦走する計画に変更した。八月十三日午前五時上高地の温泉宿を出発。岳川の森林地帯を抜け、岩のゴロゴロした急な「石斜垂」（現在の天狗沢）をあえぎ登り十時三十分国境に当る鞍部（現在の天狗の谷）に着く。ここに大半の荷物を残して十一時出発。「頂が富士形をした笠ヶ岳はその全容を顕して西に聳え、その右肩よりは緩斜線を放つて鎌尾根と結び、それから双六、蓮華、五郎に連つていゝ」とこの鞍部から望む飛驒の山々の景観を叙してある。そしていまのジャンダルム（この名称はのちに三田幸夫氏の附されたものである）（30）を白出沢の頭と仮称してゐる。

『山後一帯動色がかつた岩石の大破片、小破片が散乱している。双頭間の大岩塊の堆積しているあたりに二、三人這入れようかと思ふ。岩穴があつたが、これは単に一時的に強風を防ぐというにとどまり、近くで燃料を得ることが出来ず、水も容易に得られぬから、特別の場合のほかは露営を避けねばならぬ。假松及び岩角を力に危うき芸当を演じ、岩壁を伝ひ、第二の鞍部に下る。右側の岩壁には丈余の残雪が鼠黒い砂塵を浴びてゐた。東方に面した岩壁に沿うて後に出る。假松は次第に勢を失い全く跡を絶つてしまつた。（中略）午後一時四年ぶりで再び主公と握手の礼を交ひ、互に無事を祝した。さきに拝見した無名標柱とは変つて大正元年八月五日日本山岳会員近藤茂吉登山と記されてあつた』

第二の鞍部とはいまのロバの耳（この名称は故書上喜太郎氏が最初に呼ばれたものである）（31）の北鞍部のことであつて、上高地から頂上までの所要時間八時間は路のよく踏まれた現今の記録と比較してみても遜色を認めない。（文中に近藤茂吉云々とするが、近藤氏はこの年高野鷹蔵氏と共に富山から立山、平、針ノ木、大町と歩き大町で高野氏と別れて嘉門次を案内に上高地から穂高、槍の縦走を行つたもので、これは鶴殿、小島の両氏につき三番目の記録ではなからうか）一時二十分奥穂頂上を辞し、天狗の谷まで引返して露営地を物色したが適当な所が見つからず雨も降り出したので夕暗の中を上高地温泉に下つて第一日の行程を終えた。

翌八月十四日上高地を六時十五分に出発、前日よりずつと早く三時間半で天狗の谷に着いた。作次郎を先頭に天狗岩、間ノ岳（當時名称は附されていない。ただ「行くては螺を伏せたような峰が黒く鋭く尖つて、限りなくたけりたつてゐた」とある）と假松を手がかりに通過し、いまの天狗岩南面にある逆風のスラヴについて「この頂の下りに三十畳内外の畳を敷きつめたような所があつてその上面には礫が少し散乱してあり、処々の割目には苔や芝が頭を出してゐた」と述べられてゐる。この下り鶴殿氏は滑落し擦過傷を負つたがなおも前進を続けいまの西穂高を踏んだ。

『猪の牙の如くに空を抉つて立つてゐる峯を五つ六つ乗り越え十二時五十分南穂高の三角点を迎えた。橋は全く破壊散乱し、標石のみ石に狭まれ淋しうに空を眺めていた。橋を建てる時に三四尺切り均した位で、至つて頂上は狭かつた』さらに南行して中尾峰に出るはずであつたがここ以南は密林が興味が薄いのので中止し、雨が降り始めたので「二、三の小峰を踏み越え東側の谷を下り岳川尻に出て密林中に影を没した」とあり、いまの西穂高左俣を下り上高地に戻つてこの縦走を完了した。こうして鶴殿氏は穂高の主稜をこごとく極めて、これらの報告を詳細に山岳誌上へ発表された。

報、佐伯氏（記名はない）は天候悪化のため東穂高（現在の前穂）までの縦走を断念し三本槍のうち二本目（現在の明神第二峰か）から岳川に下つてゐる。

前出14の奥穂高岳の項において「西穂高へ続く山稜は頂上（奥穂の）から一度一寸低下して急に大きな Gendarme を形成している」と説明されており、これがその後一般に通用することになった。例え三高山岳部報告第四号の記録欄をみると、今西錦司、西堀栄三郎、奥貞雄、相良貞直

の四氏が前出十四年十月十四日上高地五千尺より壘岩の初登攀の報告に早くも三田氏のいわれたジャンダルムという名称を採用している。

柳谷より西穂高を経て奥穂高（書上喜太郎（リュックサック第四号）において「天狗岩」というのは前穂高の方から望むと奥の西尾根のスカイラインが頂上から一旦緩に左に下り、次にひと思いの大スレットまで大きく下る」とする丁度その上に驢馬の耳のよう

に二つに鉸んだその左の耳です」と記されている。



（村井米子先生推薦）
VitaminC と 葡萄糖

ビタオレンヂ

楽しい登山に スポーツに！

グット一杯美味しいジュース

本品は水にとけやすく粉末のため携帯に便利です。一杯宛ポリエチレン袋に入っています。

日本山岳会ルーム 山岳用 (13g 入) ¥10.-
有名運動具店 一般用 (23g 入) ¥20.-

発売元 土谷商事

東京都杉並区大宮前6ノ340



会員通信

親の物好き

高野 鷹蔵

この春に、南極探検隊の副隊長の西堀さんのご家庭のことが一寸新聞に出ていた。お子達のお名前が山に縁のある文字ばかりで、愉快になり、手紙を書きました。重ねて驚喜したわけです。それによると、西堀さんのそうした動機は、先輩松方三郎君の真似で、その松方君は、かくいう私の真似だということです。どこのつまりは、私がその原因をなしたわけで、考えて見れば私が一番年長で致し方ないわけですが、これを機会に会員諸君の戸籍調べをやつて見たくなりました。どうかこの一文の後につけて、まず松方君、西堀君ご自身のご筆名を煩したいものです。私の家庭は

父 高野鷹蔵(七十三才) 無職

母 アサ(六十八才)

長男 岳雄(四十四才)

三井物産KK勤務、在米アメリカン

岳雄妻 高野八重子

三男 高野 嵩(三十八才)

三井信託銀行勤務、在大阪

嵩妻 美穂子

二男、秀雄(ヒデタケ) 京大農学部卒業後戦死。四男、朝彦(アサヒコ)。五男、五男(イツオ) 何れも戦死、現在一人というわけです。長男タケオは、何処でもガクオと呼ばれて、仲々タケオと呼ばない苦情あり、今になつて考えれば、成程その通り。浪子と武雄のタケオです。かといふあたり上々とのこと。二男ヒデタケは京都にいたわけでもないが、シユウガクさんと坊主呼ばりされると文句。成程無理のない話、親の物好きが子に累を及した次第、これもザンゲ話かも知れない。孫男女各一人。

北海道の山小舎

森谷 虎彦

山日記記載の十勝岳登山の根拠地になる白銀荘に行くコースは、富良野駅下車となつてゐるが、現在あまり利用されてゐない。現在利用されてゐるのは美瑛駅下車、国鉄バスで白金温泉(二十キロ)に到り、これより徒歩八キロ、二時間白銀荘に達し、三時間、バスは夏冬と最終列車を除き上下各列車に接続して、夏期は白金温泉よりさらに四キロの望岳台まで運行してゐるので、望岳台下車一時間半以内で白銀荘に行ける。

白金温泉には旅館の他に白樺荘という山小舎があつて美瑛岳登山の根拠地となる。この夏道コースは美瑛川の支流に沿ひ美瑛富士の北側を、十勝一大雪縦走路に出るもので、日記にはないが縦走路に出る五百米ほど手前路傍に美瑛

富士ヒュッテがある。避難用の小舎で六、七名宿泊可能だが窓ガラスがないので冬はあまり快適ではない。附近には便所があり、水は雪渓利用である。なお十勝、大雪縦走路は最近刈分けも出来て楽なコースとなつたが、大雪側トムラウシ石室までは小舎がないので尾根上で一、二泊ヒバークを要する。

最近急激に旅行者の増えた阿寒国立公園内で標高千メートルの藻琴山は一般旅行者向けではないが、登山者には親しまれてゐる山である。コースは網走、または藻琴駅よりバスで山園(登山口)に到り、これより徒歩二時間で山頂に達する。山頂からの展望はまことに北海道である。この登山路の八合目、標高七百メートルの登路左手の沢の中に白銀荘ヒュッテがある。東モコト村の管理で無人小舎、燃水はあるが寝具はない。五、六名の宿泊は可能だが、冬は窓ガラスがないので寒い。眼下の川湯温泉へは立派な刈分けがあつて二時間で達することが出来る。

大山山開き祭

佐野 勇一

今年の大山国立公園山開き祭は快晴にめぐまれた六月九、十の両日予定通り行われた。九日は午後七時半から大神山神社奥宮で前夜祭でやり、ザイル祭、献饌、大被神事、舞楽奏上の後各代表者の玉串奉奠、終つて博労座広場まで炬火行進を行い山の歌合唱コンクールを開催した。十日は大山山岳会員が先導し大御幣を擁し頂上に登り各班にわかれ縦走を行った。

会務報告

六月役員総会 十三日(水)

場所 本会図書室

出席者 別宮会長、日高、松方副会長、理事太田、折井、金坂

石坂、羽鳥、徳久、山崎、評議員沼井、神谷、岩永、成瀬、渡

辺、監事石原、諸岡

議事および報告

①東北岳連発会式出席の件、五月十二、十三両日仙台で行われた東北七県山岳連盟協議会に本会から金坂理事が出席、種々意見を交換した。なお事務局は持ちまわりとし、今年度は宮城が引うけた。

(金坂)

②本会の土地、建物の件、近く体育協会の土地、建物が売却される見通しが濃くなつたので、本会としても本議を入れて図書館の移転問題を検討した。

③木暮理太郎氏十三回忌の件、六月二、三の両日レリーフのある金山で行つた。両日とも雨にたたられ参加者は少かつたが、本会から日高副会長、村井、神谷両評議員

が参加、霧の旅会、しやくなげ山岳会の協力を得て二日は前夜祭を行い思い出話などで故人をしのび三日は碑前祭を行つた。山梨支部との連絡がうまくとれなかつたが今後は山梨支部の協力を得てウエストン祭のような方法に持つてゆきたい。

(神谷)

レリーフのそばに木暮氏の略歴のようなものと書いて立てておきたい。

(日高)

④国鉄主催夏山打合せ会 六月十

二日大町で開かれた。折井理事が出席、登山コースの検討、山小屋旅館など宿泊設備、宿泊料、案内人料金などは大体昨年と同じ、なお避難対策その他について本会側の組織を説明してきた。(折井)

⑤ウエストン祭の件、七月十四、十五日上高地で行うことに決定。

⑥マナスル登山展の件、六月十二日から二十四日まで日本橋白木屋で開催。

⑦文部省の野外活動に関する安全指導のパンフレットの件。文部省では登山、キャンプ、野外旅行、サイクリング、水泳についてその安全指導のパンフレットを作製したが、登山については本会山田理事が担当執筆した。また各県の体育指導官約六十名にこのパンフレットの講義が行われ、本会から山田石坂、羽鳥、徳久の各理事が出席しパンフレットに書かれた登山部門について説明を行つた。

(石坂)

⑧月例会計報告 (太田)

⑨マナスル登山隊の件 マナスル登頂成功を祝しハント、デシオ、フランス山岳会、米国山岳会、ヘンダーソン夫人、カルカッタ総領事、ネパール外務大臣をはじめ国内からも多数の祝電をうけた。一九五二年から今回までマナスル登山に要した総額は約九千八百万円であつた。政府ではマナスル記念タバコおよび切手を発売することになった。なおガルトツェンの訪日は本人の都合により中止、横氏は五月二十日仙台市の名譽市民に

(成瀬)

された。

七月役員総会 十八日(水)

場所 本会図書室

出席者 別宮会長、日高、松方副会長、理事折井、千谷、松丸太田、村山、山崎 評議員沼井村井、岩永、神谷、渡辺、藤木島田 監事諸岡、石原

議事および報告

①ウエストン祭の件、今年は信濃支部が非常に力を入れてくれ盛大であった。六月十三日前夜祭を松本信大講堂で行い、マナスル隊長、日下田隊員のマナスル報告のちマナスル写真展を開催、十四日は上高地ウエストン像前で前祭が行われた。本会からは別宮会長、日高副会長をはじめ沼井、藤木、石原、諸岡、折井、坂倉、甲府支部今井、三井、九州の加藤数功、その他石川支部、北海道支部などからも多数会員が集り、約二百名が参加した。十五日は天候が悪かつたが約五十名が西穂高小屋から西穂高に登った。

(折井、沼井)

②夏山と高原展、東鉄管理局、毎日新聞後援で七月十七日から二十二日まで白木屋で開いた(折井)

③遅れていた山岳第五十号は原稿も大体出そろい十月半ばには出版出来る予定。

(折井)

④月例会計報告

(太田)

⑤支部規定決定の件 各支部より異存ないむね返答あり(回答のない大阪支部には太田理事が連絡) 本日の役員総会において草案の通り正式決定する。

⑥マナスル隊帰国歓迎会の件、八月九日午後五時三十分から麻布国際文化会館で行うことに決定、会

費四百円。

⑦体協敷地の件 体協では現在の場所を日大に売り神宮外苑ラグビー場附近に新ビルの建設を計画しているのでも本会としてこれの対策を立てたい。新ビルを建てた場合本会の既得権は認められる。

島々で登山講演会

ウエストン祭にちなむ登山講演会が七月十六日島々安曇小学校で開かれ、本会村井評議員の講演、高山信濃支部長の説明で一九五三年マナスル第一回登山のスライド映写があつた。

マナスル登山隊寄附

(敬称略)

千円 千円 四百円 貳百円

高山忠四郎 塚田孝治 石川支部 柴田重太郎

図書基金寄附

五千五百六拾参円 募金箱より
累計参万八千五百六拾参円也

図書寄贈

貳百円 早川 和宏
貳百円 安齊 正明
累計四万五千参百円也

登山全書、第一、第二巻 (敬称略)
河出書房

日本観光事典

針葉樹十一号(一橋大部報)

一橋大山岳部

ヒマラヤの真珠(理論社)

折井健一

山日記(一九五六年版)

牧野文子

パウル・パウアー
カンチェンジュンガをめざして

計夫 主達 田望 辺月

新刊

四六判二九二頁 総クロース上製
アト口絵三〇頁
定価 三九〇円 千40円

ヒマラヤ登山の方法を根本的に新しくしたといわれるカンチェンジュンガ登攀の歴史的記録。この物語は、人間の社会に登山の行為が続けられる限り、永久に忘れられることはないだろう。

この書こそは「エヴェレスト登頂」、「アンナプルナ」または「ノー・ピクニック・オン・マウンテン」を読んだ人々に、等しく最大の感動をもつて読まれるに違いない。

東京銀 実業之日本社 振替東京 座西一 三二六番

山で唄う歌(著漢堂)
山なみ(〃) 以上 戸野 昭
ザイルのトップ(白水社)
喪の銀嶺(〃) 以上 白水社
やまと博物館
大野山岳博物館後援会
国立公園(二十六・三十五号)
平野 丘
墨岩尾根より滝谷登攀
早大山岳部

昭和三十一年七月廿五日發行

東京都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 法人 日本山岳會

編纂者 山崎 安治

頒価二十円

電話神田(六)八九五二番

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂池五番地

印刷所 株式会社 技報堂